

短大生における色の嗜好性と性格の関係についての考察

沢谷 有梨

A study of the relationship between color preference and personality among junior college students

Yuuri SAWAYA

1. はじめに

人はそれぞれ特定の色を好み、選択する。その「色の嗜好性」と「性格」の関係性についての関心は非常に高く、これまで異なるアプローチ方法や考察がされている。

まずこの分野の研究の先駆者の1人が、1934年にカラーコンサルタントという職業を世界で初めて確立したフェイバー・ビレンである。ビレンは「色彩と人間の性格に関する<科学>が存在しうるのはないか」とし、「こうした観察に関する他の学者たちの学術書や研究論文に目を通し続け」、1940年に自身の「観察しえたすべての記録を増補」して『色彩による性格分析』を著作する (Faber Birren 2003) ⁽¹⁾。その後も同テーマによる著書を15冊以上出版した。日本では野村が「特定の色を好む人の人柄が分かってくれば、人間関係のコミュニケーション効率は一段とよくなり、人間相互の理解は鮮明に進展するものと思われる。」とし、特定の色を好む人の性格や適職、相性についても解説している (野村2015) ⁽²⁾。

その一方で林は、「意識的性格としてのBigFive性格」と「色彩選好の間には関係性は見られなかった」としつつも、「色彩選好は深層的なイメージ連想傾向としての無意識的性格とは関係が見られるが、表層として現れる実際の思考・行動パターンとしての意識的性格とは関係がないという結論が最も妥当であろう」(林2011) ⁽³⁾ とした。さらに松田・名取・破田野らは、色彩嗜好調査と性格検査の比較にはその他の様々な要因が絡むとし、「季節、時刻、場所、対象者の年齢、職業を限定」した調査を11年継続で行った。この結果、YG性

格検査を用いて調査した「約半数の色にパーソナリティとの関与が確認された」とした上、パーソナリティ特性と好みの色のイメージの相関関係から「自らのパーソナリティによく似たイメージの色を好み、着たいと思ひ、よく着る」という関連性を示唆した (松田・名取・破田野2019) ⁽⁴⁾。

そもそも色彩心理学という分野はまだ歴史が浅く、中でも色と性格に関しても先行研究は数が少ない。だからこそこのテーマについては様々な角度から考察を深めていくことに意味がある。本研究は『色と性格の心理学』⁽⁵⁾の著者ポーポー・ポロダクション氏 (個人名)の協力を得て、色の嗜好性と性格特性の相関関係について調査・分析を行うことにより、この分野のさらなる発展に積極的に関わっていくこと、さらには本学の学生の自己分析や、日常生活での円滑なコミュニケーションに色の活用を目指すことを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象・調査時期

色の嗜好性と性格についての関係を明らかにするために、千葉経済大学短期大学部ビジネスライフ学科・こども学科の女子110名を対象として、基礎ゼミ (沢谷クラス)、専門ゼミ (ファッションゼミ) II、色彩学 I、パーソナルカラー I、全4教科7クラスにおいて調査を実施した。調査は、令和5年7月5日から20日に行った。

2.2 倫理的配慮

本研究は、千葉経済大学・千葉経済大学短期大学部倫理審査委員会の承認を受けて実施した。(千経短第6号)

2.3 調査方法

まず、第一段階として以下の2種類のアンケート調査を行ない、それぞれ被調査者個人と集団の結果を得た。

1) 「好きな色と嫌いな色」についてのアンケート調査

アンケート調査に使用する色を決定するにあたり、ポーポー・ポロダクションが著書『色と性格の心理学』^⑤と連動した形で作成した性格分析用のカラーカードを参考にした。アンケートをシンプルに行うため色数を絞ることとし、カラーカード全20色から、基本5色相である赤、黄色、緑、青、紫と、ピンク、水色、藤色、白、黒の計10色を選択した。これらの物体色の数値であるマンセル値から光源色のRGB値へ変換し(表1)、画面上で実際に色を見ながら「とても好き、好き、どちらでもない、嫌い、とても嫌い」の5段階で選択回答を得た。色の提示順は赤、ピンク、黄色、緑、青、水色、紫、藤色、黒、白である。なお、調査はGoogleアンケートで実施され、回答所要時間5分程度である。

表1 好きな色と嫌いな色アンケートのRGB値

赤	(213,40,60)	ピンク	(250,196,217)
黄色	(255,230,37)	水色	(179,227,238)
緑	(38,154,96)	藤色	(178,160,205)
青	(72,90,177)	白	(255,255,255)
紫	(145,82,165)	黒	(0,0,0)

2) 新版TEG3/東大式エゴグラム(オンライン版)による調査

複雑な人の性格を捉えやすくするために、東京大学医学部心療内科TEG研究会によって開発された「新版TEG3/東大式エゴグラム」による性格診断テストを実施した。

エゴグラムとは、アメリカの精神科医であるエリック・バーン(Berne,E.)が創始した交流分析(Transaction Analysis)における自己分析法の1つであり、ジョン・M・デュセイ(Dusay,J.M.)によって考案されたものである。現在日本国内では様々なエゴグラム質問紙が開発され活用されているが、本研究に

おいては「より少ない項目数で精度の高い測定を行う」ことができる項目反応理論を用いて作られた新版TEG3/東大式エゴグラムのオンライン(CAT)版を採用した。

被調査者は自分の行動パターンに関する質問に対して「はい・どちらでもない・いいえ」で回答を求められた。所要時間10分程度である。

エゴグラムは「5つの自我状態を視覚的に把握できるように」、回答から得られるそれぞれの得点(t得点)を棒グラフで表す。その「各尺度の高低の関係により、性格特性を理解することが可能である」(東京大学医学部心療内科TEG研究会2019)^⑥が、本研究においては一言で表し難い複雑な性格を構成するこの5つの自我状態の高低と色の嗜好性との関係を捉えることにした。

エゴグラムにおける5つの自我状態とは、

- ・批判的親 (Critical Parent : CP)
- ・養育的親 (Nurturing Parent : NP)
- ・成人 (Adult : A)
- ・自由な子ども (Free Child : FC)
- ・順応した子ども (Adapted Child : AC)

である。これらにはそれぞれ見方によって肯定的に働くプラス面、否定的に働くマイナス面がある。表2は5つの自我状態が高い場合のプラス面、マイナス面と、その自我状態が低い場合の特徴を加えたものである。

表2 5つの自我状態の特徴

尺度	高い場合のプラス面	高い場合のマイナス面	低い場合の特徴
CP	自分に厳しい 目標が高い 理想を追求 責任感が強い 秩序を守る リーダーシップ	他人に厳しい 頑固 批判的 排他的 支配的 権威的 攻撃的	自他に高い要求をしない 友好的 責任感や倫理感に乏しく躰や指導が苦手
NP	親切 寛容的態度 他者を受容 共感的 いたわり 思いやり 世話好き	過保護 おせっかい 他者の自主性や自立性を奪う	他人に関心がない 思いやりに欠ける 閉鎖的 対人関係に乏しい
A	現実的 理性的 合理的に判断し行動 事実に基づき公正に判断 論理的 効率的	打算的 機械的 人間味に欠ける 冷たい ユーモアに欠ける	事実に基づいた合理的な判断が困難 感情に基づき判断するため、現実認識が歪む
FC	本能的 直感的 自由奔放 無邪気 明朗快活 好奇心 積極性 創造性	自分勝手 他人への配慮に欠ける わがまま 依存的 無責任 衝動性	感情を抑制し素直に表現できないため、物事を楽しめない 消極的 沈みがち
AC	従順 素直 協調性 忍耐強さ 他人に対して寛大	自分の思いや感情を表現できない 他人に依存 他人を優先 劣等感 人の評価が気になる	非協調的 融通がきかない 他人の言葉に耳を貸さない 他人に惑わされない

(東京大学医学部心療内科TEG研究会⁽⁶⁾⁽⁷⁾、新里・水野・桂・杉田⁽⁸⁾より作成)

3) 色の嗜好性と自我状態の相関関係

第二段階としての、「好きな色と嫌いな色についてのアンケート調査」の回答値と「新版TEG 3による性格診断テスト」の得点間の相関関係については、ピアソンの積率相関係数を用いた。なお、統計的有意水準は

5%未満に設定した。

3. 結果

3.1 「好きな色と嫌いな色」についてのアンケート調査結果

好きな色と嫌いな色について、被調査者全体の色別平均値と標準偏差を表3に示した。

3.2 新版TEG 3 / 東大式エゴグラムについての調査結果

被調査者全体の5つの自我状態についての平均値と標準偏差を表4に示した。

3.3 相関関係について

ここで求めた相関係数(r)を表5に示した。CPと赤、NPとは赤・緑の2色、FCと黄色については正の相関が、FCと藤色には負の相関がそれぞれ認められたが、それ以外については有意な相関は認められなかった。

表3 各色に対する嗜好性平均値と標準偏差 (平均値の高い順)

順位	色名	平均値	標準偏差
1	水色	4.43	0.82
2	藤色	4.19	1.09
3	白	4.15	1.18
4	青	4.05	0.98
5	黒	4.02	1.13
6	ピンク	3.92	1.15
7	紫	3.64	1.02
8	緑	3.55	1.11
9	黄色	3.47	1.13
10	赤	3.18	1.02

表4 尺度ごとの平均値と標準偏差

尺度	CP	NP	A	FC	AC
平均値	48.90	55.55	61.97	57.50	61.06
標準偏差	8.32	12.59	10.10	10.06	10.92

4. 考察

表3の色の嗜好性についての平均値・順位から水色、

表5 各色と尺度ごとのt得点の相関係数(r)

色名	CP r値	有意差 判定	NP r値	有意差 判定	A r値	有意差 判定	FC r値	有意差 判定	AC r値	有意差 判定
赤	.195	*	.225	*	.092	n.s.	.080	n.s.	-.009	n.s.
ピンク	-.028	n.s.	.045	n.s.	.164	n.s.	.035	n.s.	.012	n.s.
黄色	.030	n.s.	.062	n.s.	-.017	n.s.	.191	*	-.044	n.s.
緑	.089	n.s.	.205	*	-.080	n.s.	.144	n.s.	-.011	n.s.
青	.005	n.s.	.037	n.s.	-.085	n.s.	.031	n.s.	-.066	n.s.
水色	-.053	n.s.	.098	n.s.	.014	n.s.	.001	n.s.	.026	n.s.
紫	.013	n.s.	-.044	n.s.	-.116	n.s.	-.139	n.s.	-.076	n.s.
藤色	-.038	n.s.	.124	n.s.	.147	n.s.	-.230	*	.054	n.s.
黒	-.069	n.s.	-.023	n.s.	-.036	n.s.	-.124	n.s.	-.018	n.s.
白	-.035	n.s.	.067	n.s.	.076	n.s.	-.002	n.s.	.054	n.s.

* : p<0.05 n.s. : not significant

藤色、白は平均値が上位にあり相対的に好まれていることが分かった。これらの共通点は高明度、低彩度色または無彩色である。また赤、黄色といった高彩度の暖色系は相対的に平均値が低かったが、最下位の赤であっても平均値は3.18あり、嫌われている色であるとは言いがたい。松田・名取・破田野は「暖色系の高彩度色は情緒安定外向傾向の人が好み、低彩度高明度の青は、情緒不安定内向傾向の人が好んだ」(松田・名取・破田野2019)⁽⁴⁾としているが、表4の自我状態の平均値からも、ACが高めであり、「従順・自分の思いや感情を表現できない・劣等感」といった特徴を「水色」が捉えていると考えられる。

さらにここで注目したのは、ピンクの順位が6位ということである。2009年に実施された、働く女性に対して「一番好きな色」を問うアンケートでは年代別に見てもピンクが1位であり、特に20代女性は27.3%がピンクを1番好きとする調査結果(サンケイリビング新聞社2009)⁽¹⁰⁾であった。これに対し、調査対象年代は異なるが「2024女の子人気色ランドセル」ではライラック・ラベンダーなどのパープル系が24.1%で1位であり、21.0%のピンク、17.0%の赤に続き、アイスブルー・ベビーブルー・スカイブルーなどの水色系が15.6%で4位となっている。パープル系、水色系が人気色としてこの3年ほどで急上昇(エデュスタイル2023)⁽¹¹⁾という状況は、本調査の嗜好色の結果とも関連があると考えられる。これらの要因としてはコロナ禍における対人

関係の制限や市場の人気キャラクターの影響などが推測されるが、調査を継続していく中で性格特性の変化との関係にも注目していきたい。

表5に示した各色と5つの自我状態との相関については、有意な相関係数が得られたものがあったとはいえ、数値としては低いものであった。その前提ではあるが、相関が認められたものについて、表2の「5つの自我状態の特徴」とポーポー・ポロダクションの示す「その色を好む性格」(ポーポー・ポロダクション2018)⁽⁵⁾とを比較してみた。

まずは正の相関が認められた赤とCPについてであるが、赤を好む性格は「活動的で行動力があり、正義感が強い・意志の強い人・リーダーの資質あり」などであり、CPの「目標が高い・理想を追求・秩序を守る・リーダーシップ」という特徴と重なる。また、黄色を好む性格の「知的で上昇志向が強い・新しいものが大好きで、好奇心旺盛・個性的で発想が他人と違う・面白い人で、グループの中心人物・少々飽きっぽいところがあり・自由主義」などはFCの「直感的・自由奔放・好奇心・創造性・無責任・自分勝手」という自我状態の特徴に類似している。逆にこのFCと負の相関が認められた藤色を好む性格については、「感性が豊かでクリエイティブ・優しく繊細・思いやりがあり・人見知りをする」などであり、人間関係を構築するのは上手・人との調和を考える」などであり、黄色を好む外交的で自己中心的な自由なこどもの性格とは逆方向といえるだろう。

ところが、NPについては緑と赤という反対色である2色との正の相関が認められている。まず緑を好む性格については「温和でのんびり屋・内面には強い信念がある・調和を図るものの、個人主義な面も・好奇心が強いが、依存性がある・社会性が強く真面目・平和主義で人と争うことを好まない」であり、NPの「寛容的態度・共感的・思いやり・他者を受容」といった特徴と似ている面もあるが、緑好きの持つマイペースで個人主義的な面が含まれていない。一方で前述の赤を好む性格とNPの特徴は全く方向性が異なるのだが、ポーポー・ポロダクションによると「赤が好き人は2タイプ」に分かれ、前述の「赤が本当に好きな赤好き」の他に、「赤の力を借りたい赤好き」がいるとしている。後者の、赤の力を借りたい赤好きの性格について確認すると、「赤に憧れて行動的になりたいと無意識に頑張っている・無意識に赤いものを選び、その力で自分の行動力を高めようとする・孤独感が少しあり、でも人に対しては愛情溢れる優しい人・人付き合いに疲れてしまう人も」などがあげられており、これであればNPの養育的親としての特徴が重なってくる。これらがNPと相反する2色に相関が認められた理由であると推測される。

5. 今後の課題

数値は低いものであったとはいえ、いくつかの相関関係が認められた本研究について、次の課題が考えられる。まずはシンプルな色数で回答できるように配慮したこともあり、今後は色数を増やしていくことでさらに相関関係の認められる色が見つかる可能性がある。例えばポーポー・ポロダクションの示す「その色を好む性格」⁵⁾における、オレンジを好む人の「元気・陽気・行動的」からFC、紺を好む人の「判断力と知恵も持つ」からA、青緑を好む人の「控えめな性格で、遠慮がち」からACといった組み合わせである。これらの仮説を検証するために、オレンジ、紺、青緑などの色をさらに追加して調査していきたい。

また、本調査では表4の5つの自我状態の平均値からCPが最も低いという結果を得たが、これはCPが「父

親的な役割」を担う批判的な親の自我状態であり、女子学生が調査対象であったため低く出ているとも考えられる。今後よりデータを充実させていくには母集団を変えて男子学生も含めた調査をすることも検討したい。

謝辞

本研究に関わりご指導いただいた千葉経済大学短期大学部こども学科 清水洋生准教授、ならびに本研究にご協力いただいたポーポー・ポロダクション氏に、心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- (1) フェイバー・ビレン『好きな色嫌いな色の性格判断テスト』青娥書房, p10-11, 2003
- (2) 野村順一『色の秘密 色彩学入門』p2-9, p84-105, 文藝春秋, 2015
- (3) 林智幸「色彩選好と意識的性格としてのBigFiveの関係性」静岡英和学院大学 静岡英和学院大学短期大学部紀要, 9, p103-112, 2011
- (4) 松田博子, 名取和幸, 破田野智美
「色の好みとパーソナリティとの関係－色の感情的意味からの考察－」日本色彩学会誌, 43 (2), p69 - 80, 2019
- (5) ポーポー・ポロダクション『色と性格の心理学』日本文芸社, p44-109, 2018
- (6) 東京大学医学部心療内科TEG研究会『新版TEG 3 マニュアル』金子書房, p6-7, p21-22, 2019
- (7) 東京大学医学部心療内科TEG研究会『新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン』金子書房, p7, p19-23, 2006
- (8) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康『交流分析とエゴグラム』チーム医療, p26, 1986
- (9) ジョン・M・デュセイ『エゴグラム ひと目でわかる性格の自己診断』創元社, 2020
- (10) サンケイリビング新聞社「OLマーケットレポート vol.82」2009 <https://www.sankeiliving.co.jp/research/ol/082.html> (2023年12月18日閲覧)
- (11) エデュスタイル「ランドセルナビ」2023 https://www.randoserunavi.com/blog/index.php/recommend/color_girl/ (2023年12月18日閲覧)